

潘佩珠『天か帝か』の欠落部分について

—— 20世紀東アジア史解説の手がかりとして ——

吉 川 次 郎

はじめに

長岡新次郎と川本邦衛の編により平凡社東洋文庫から出版されたファン・ボイ・チャウ（潘佩珠、1867-1940）の著作集『ヴェトナム亡国史他』¹（以下、東洋文庫版と略記する）は、1966年の初版以来、日本でベトナム近現代史に関心をもつ読者にとって基本書の地位を守っている。それは一義的には、原著者のチャウがフランスからの独立を志向した民族主義者として近代ベトナム史上に名を馳せ、現代ベトナムの指導者ホー・チ・ミンと並ぶきわめて重要な人物であったことに由来する。同時に、チャウが20世紀初頭にベトナム人の日本への大規模な留学運動である「東遊運動」を推進した関係から、日本史の文脈からもその著作の翻訳・整理が不可欠であり、同書の出版は相当の紙幅を占める「解説」の充実ぶりと相まって、近代の日越関係史の歩みを振り返るうえで大きな意味を持っていた。もちろん、翌年がチャウの生誕百周年ということもあったが、さらにいえば、1965年の北爆によってベトナム戦争が本格化するなか、アメリカ軍の動向と密接な関係にあった当時の日本において出版がなされたことは、それ自体が歴史を構成する静かな一コマとして象徴的な意義を帯びていたといえよう。

ただ、同書を味読するなかで、筆者は収録されている文献にやや不完全な部分があることにも気づいた。たとえば、表題作である『ヴェトナム亡国史』において、「……」と書かれている部分（16頁）は省略の存在を示している。ただし、その判断の是非はともかく、少なくともそこに省略があることはわかる。より大きな疑問は、省略が明示されていないにもかかわらず欠落している部分があることで、そこには底本の問題が絡んでいる。本稿は、冒頭で述べたように東洋文庫版出版の価値については深い敬意を払いつつ、特に同書に収められたチャウの著作『天か帝か』

1 潘佩珠著、長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』平凡社、1966年。なお、同書には、「ヴェトナム亡国史」・「獄中記」・「天か帝か」・「海外血書初篇」の4作品が収録されている。

の欠落部分の存在を指摘してその内容を補い、あわせて日本語訳がつくられる過程で生じた「欠落」そのものに20世紀東アジア史を読み解く一つの手がかりを見出そうとするものである。

I 『天乎帝乎』はどのような書物か

『天乎帝乎』（邦題『天か帝か』）は、1923年に上海のフランス租界内文明印書局で刷られたパンフレットともいべき小冊子である（以下、原著と略記する）²。この年、チャウは主に浙江省杭州の『兵事雑誌』で執筆活動に従事していた。これに先立つ数年の間には、第一次世界大戦の趨勢に乗じて雲南の昆明を訪れたり、大戦後にはフランス植民地政府から独立運動を放棄して仏越の提携路線を採るように持ちかけられたりということがあった。また、しばしば日本や広東を訪れ、特にロシア革命の成功から社会主義への関心を抱き、北京に赴いてソヴィエトの関係者と接触している。一方、出版翌年の24年には、広東におけるインドシナ総督メルラン襲撃事件の発生を受けてベトナム国民党の宣言を書き、さらに25年には上海で逮捕されてベトナムへ送還されるという悲運に見舞われた。そうしてみると、ベトナム独立を目指してどのような道を歩むべきか大きく揺れ動かなかで、『天乎帝乎』執筆の1923年はいわば谷間にある一年であったことが伺える。

自伝のなかで、チャウは「『天乎帝乎』一冊は、フランス人の罪悪を全力で攻撃したもので、内容は大きく三つの部分に分かれる。一つは、人の国を滅ぼす宗教家、二つ目は人種を滅ぼす法律と政治、三つ目は人種を滅ぼす教育である」³とまとめている。フランスによる苛烈なベトナム植民地統治の内情を訴えた同書は、中国で出版されたこともあり、胡適や沈鈞儒、景定成といった知識人が序を寄せた。胡適は「序一」において、ベトナムの志士たちに「無限の同情」を抱くと述べるとともに、フランス人が「自由・平等・博愛」の三原則を誇りにしているにもかかわらず、ベトナム人に対して残酷な手段をとっていることについて、「人類史における大いなる恥辱である」と記している⁴。それは新文化運動以来の彼の立場からもより説得力を持つ発言であった。また、沈鈞儒による「序二」は、大戦後の「民族自決」が全世界にもたらした影響をふまえ、イン

2 筆者はこの原著を中山大學東南亞研究所（当時）で閲覧した。原寸は縦18.5cm、横12.5cmで、「越南興地全図」および胡適による「序一」は欠落していた。なお、同書はもと嶺南大學図書館の所蔵で、鍾榮光に献本されたものである。

3 潘佩珠「自判」本文、313頁。なお、潘佩珠の自伝である「自判」（別名「潘佩珠年表」）には各種の版本があるが、本稿では入手しやすい内海三八郎著、千島英一・櫻井良樹編『ベトナム独立運動家潘佩珠伝—日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯—』芙蓉書房、1999年に附属の原文を使用する。以下、同じ。

4 注2に記したように、筆者が閲覧した原著では胡適の「序一」は欠落していたため、Phan Bội Châu: Toàn tập 3, Chương Thân sưu tầm – biên soạn, Nxb. Thuận Hoá, 1990, tr. 504 及び Phan Bội Châu: Toàn tập 5, Chương Thân biên soạn, Nxb. Thuận Hoá, 2000, tr. 265. を参照した（後者は巻末に漢文版あり）。なお、本稿の指摘する欠落部分は、これらのベトナム語のファン・ボイ・チャウ全集には当然、すべて記載されている。

ドでのガンディー逮捕、アイルランドの紛争、朝鮮の志士たちの絶えざる闘争に言及している。そして、チャウの「天」・「帝」というモチーフについて、「天帝を代表しているのは、ベトナム人自身にほかならない。したがって、ベトナム人自身が奮闘し改造しない限り、雲を払って天日を仰ぐ希望は決してないだろう」という具合に、民族自決の潮流からチャウらの運動に支持を与えるものであった。

フランスが植民地統治の手段として不公平な法律によってベトナム人をもがんにがらめしている現状を訴えることは、『天乎帝乎』の重要な目標の一つであった。相当な紙幅を割き、具体的な条文をあげて詳細な分析を加えていたため、読者に強い印象を与えたものと思われる⁵。ただ、『天乎帝乎』のより大きな特徴は、宗教＝キリスト教がフランスのベトナム侵略において果たした役割の強調である。その点は全体の「結論」からも明らかで、『国風日報』を発行したことで知られる景定成が寄せた「序三」でも、「宗教が人の国を滅ぼすことの罪悪を、人類の歴史からその痕跡すらもきれいさっぱり洗い流すことを願う」と正しく反映されている。ところで、後述するように、この宗教批判というテーマもまた当時の中国が直面していた反キリスト教運動の高まりという時代背景、いわば中国の文脈に対応するものであった。そのことに触れる前に、まずは原著出版以降のさまざまなテキストについて押さえておきたい。

II 底本の問題—日本における『天か帝か』の受容

1923年に上海で原著が出版されたのち、1928年にその邦訳が上海南溟会より出版された。翻訳したのは「南溟生」である⁶。実はこの翻訳が日本で流通した各種『天乎帝乎』の源流となっており、1966年の東洋文庫版『天か帝か』は1932年の第二版を底本にしている。

その「訳者序」には、著者である「南溟生」が、おそらく1928年の「陽春三月」に「大陸遊歴」の途上で訪問した「老將軍」から「アンナン（安南）の王族疆樞殿下」を紹介され、十日間にわたって対話に及んだことが感動をもってつづられている。畿外侯クオン・デ（疆樞、1882-1951）はベトナムの王族で、東遊運動にも加わり、チャウらの独立運動の象徴となった人物である。

旧知の「老將軍」と語り合っていた内容が、「アジア民族の運命やら、西力東漸の歴史」であ

5 そのような構成は、あるいは面会したソヴィエト大使館の随員の一人からベトナムにおけるフランス人の真の姿を詳しく記すように依頼されたことへのチャウなりの回答でもあつただろう（潘佩珠「自判」本文、311頁）。

6 東洋文庫版の解説、長岡新次郎「日本におけるヴェトナムの人々」は、ファン・ボイ・チャウの『獄中記』の翻訳者「南十字星」を何盛三であると推定している。何はエスペラントに習熟するとともに『北京官話文法』を表した人物で、思想的には大川周明らのアジア主義運動に共鳴した人物であった（280頁）。「南溟生」は『獄中記』に寄せた「序」において、この「南十字星」を「盟友」と呼んでいる。『獄中記』は「南溟叢書二」として出版されたが、先行する「南溟叢書一」こそが南溟生訳『天乎帝乎』であった。

り、また「同州の先覚であるわが日本、今日の状や如何？」として、青年の享楽志向や政治家の墮落を嘆いているところから、訳者「南溟生」の立場をうかがい知ることができる。後述の大岩誠も引用しているように、「安価にして神経衰弱的なるコスモポリタニズムの信者が、光栄ある建国の心を忘れ、人類の歴史を無視して、国基をさえ揺がさんと図れり」という日本への現状理解を抱きながら、「排日声中」の上海で訳し終えたのが、クオン・デから贈られたベトナム独立運動の著作の一冊『天乎帝乎』であったという。

ところで、南溟生の訳した『天乎帝乎』には「例言」が付されており、そこでは原著者であるファン・ボイ・チャウの紹介とともに、原著について次のように注記してある。

二 原書は、癸亥年正月（大正一二年、一九二三）の出版にかかり、もと潘君が故国の窮状を記して、これを中華国の有志に訴えんとしたものであるがゆえに、文中自らその態がある。今あえてこれを改めず。

原書にはなお、中華の名士胡適ら二、三氏の序文があるが、本書には皆これを略す。

（下線部は筆者による、以下同じ）

この「例言」の記述を素直に読めば、「南溟生」が原著の生まれた背景を重んじて原文に手を加えず、また、胡適らの序言の存在を明示しながら、本文ではないために省略したことを誠実に伝えていることがわかる。であればこそ、実際には訳文に大きな欠落があることが気になってくる。

なお、筆者管見の邦訳テキストは以下の通りであるが、すべて「南溟生」の翻訳を元にしており、その欠落はいずれにも共通するものであった。

①『天乎帝乎』（1932年、第二版）

②潘是漢記『天乎帝乎』（年不明）

これら2つの資料は国会図書館所蔵のマイクロフィルム⁷に収められたもので、後者は手書きである。

③潘^{マツ}是漢「天乎、帝乎」（上・中・下）（1934年12月、1935年2・4月）

雑誌『大亜細亜』第2巻12月号、第3巻2・4月号に3回に分けて連載されたものである。冒頭に訳者南溟生による「例言」を少し書き換えたファン・ボイ・チャウの人物紹介を掲げる。なお、上編の掲載された『大亜細亜』第2巻12月号の編集後記には、「「天乎、帝乎」（潘^{マツ}是漢）は亦以て満洲統治の殷鑑であらう」と記されている。

④『越南志士手記 仏領印度事情』（年不明）

アジア経済研究所所蔵のこの謄写版資料は、「はしがき」に「尚最近に於ける當国の情況は附

7 Japanese documents of government agencies, research institutes 4, Library of Congress Photoduplication Service, 1996, R.33.

録（昭和十一年夏親しく全地を視察せる山口高商西山教授氏談）に摘記せる如く」とあり、1936年以降のものである⁸。

⑤大岩誠『安南民族運動史概説』ぐるりあ・そさえて、1941年

同書は、それまでのベトナム独立運動の経過を記述するとともに、ファン・ボイ・チャウの手になる『獄中書』・『天乎帝乎』・『越南国民党沙面炒弾案声明書』が出版されたいきさつについて、翻訳者である「南十字星」子・「南溟」子の存在も含めて詳細に語っている。大岩はそれら3つの文献を収録した動機について、次のように語る。

私は叙上附録の三文書が今日において既に稀覯本に属するので、昨夏以来その刊行普及を私かに志し、機会を得れば其の原本を入手し、綿密な校訂及び注釈を施して世に贈らうと考えていた。然るに努めて倦まざりしに拘らず容易に私の望む好機に恵まれず、素志に反して今日に及ぶうちに、世人の周知するがごとく遷延を許さぬ時局となつたため、茲に急に上梓する運びになった。ゆえに已むを得ず私は最初の計画を一時延期して、「南十字星」子及び「南溟」子の邦訳を成るべく其の原形のまま、覆刻して公にすることにした。蓋し先覚の志を偲び其の尊ぶべき業績を追想するよすがとも考へたからである。読書子諸賢が幸に拙文「概説」によつて越南民族の志を読み取られ、さらに叙上二先覚者の邦訳を通じて、潘是漢の訴ふところを知り、彼等同洲民族の所期する所以を察知せられれば、私の喜びは之に過ぎない⁹。

もちろん、ここでいう「遷延を許さぬ時局」とは、1940年から41年にかけての日本軍による仏印進駐を指す。こうして風雲急を告げる時代状況を背景に、「先覚者」たる「南溟生」の翻訳業績が新たに上書きされたのである。しかも、大岩の紹介は1941年9月20日付の「追記」として次のようにも述べている。

本書の印刷工程が進められているとき、幸ひにして私は『獄中記』及び『天乎帝乎』の原本を入手したが、それは南溟子及び南十字星子の用ひたものと同じ版本であつた。ゆえにこれによつて、本書校正の際、原文と訳文とを綿密に照合し、先人の訳文に誤なきことを確認し得た¹⁰。

8 なお、ここで触れられている山口高商の西山教授とは西山栄久を指す。西山は1936年7月26日からの37日間にわたる中国南方視察旅行の過程で、ベトナムのハイフォン・ハノイ・ラオカイなどを訪れている（JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015687600、本邦人満支視察旅行関係雑件／補助実施関係第五卷（H-6-1-0-3_2_005）（外務省外交史料館）。なお、同資料は『大阪毎日新聞』に掲載された報告記事を収録している）。

9 大岩誠『安南民族運動史概説』ぐるりあ・そさえて、1941年、14-15頁。

10 同上、16頁。

下線部は、より正確には「先人の抄訳に誤なきこと」と記すべきであつたらう。やや大げさにいうならば、日本に流通する『天乎帝乎』の内容に疑いを容れる機会は失われ、ここに欠落部分のある日本独自の系統の『天か帝か』が誕生したともいえる。大岩はさらに太平洋戦争開戦後の1942年に『南アジア民族政治論』を著し、先に自著に収録したファン・ボイ・チャウの邦訳本について「権利所有者の許可を得て覆刻公表した」ことに触れ、「資料をできうるかぎり公表し同志の方々の研究に資するのは是また奉公のみちであると、わたくしは確信する」と述べている¹¹。

Ⅲ 『天か帝か』の欠落部分

「南溟生」訳第二版を採用した東洋文庫版『天か帝か』の「結論」部分に次のようなくだりがある。

〔前略〕いわんや強権家の勢威赫々、横謀周到、まさに英米を抑え、日露をはばからしめ（現今の各強国、一国としてあえてフランス人に対し、アンナン開放を提議する者もない。これをもってフランスの勢威の大なるを見得よう）、しかもまた偽宗教家はその波を推して、その虐を助ける。われらいづくに向かつてか、その不平を訴うべきぞ！

われら宗教家の毒をなむるや久しい。あるいは人のいうがごとく、二十世紀のヤソ教徒は、十八世紀初頭の教徒に異なるところあるか。予はあえて断案を下さない。〔後略〕¹²

（〔 〕内は筆者による省略・補足を示す、以下同じ）

本稿の指摘する欠落部分¹³は、引用文の改行の直前に本来訳されているべきもので、原著では48頁から51頁にかけての箇所である。以下に、この重要な欠落部分の原文を示し、その翻訳を試みるとともに、あわせて内容についての初歩的な分析を試みたい。

雖然、近日有一好消息。頗予吾儕以一線之希望者。則為世界基督教學生同盟會，以去年四月日開會於北京清華學校是也。吾尚記開會之第一日為四月初四日，世界各國代表聚於一堂，安南亦有

11 大岩誠『南アジア民族政治論』万里閣、1942年、191頁。

12 東洋文庫版、202頁。

13 実は、「結論」における目立った欠落部分はほかにもう一か所ある。それは「あるいはいう、フランス人の奉ずるところはカトリック教であつて、他のヤソとは、その教えを異にすと」に続く、旧教と新教の異同を論じた部分である（東洋文庫版203頁、原著51-52頁）。チャウの議論は、両者は根本的に同じであつて、違いがあるとしても些細な点にとどまるというもので、日本語訳における「あるいは両者異なるところもあるべし」というまとめに収斂する。ここは分量こそ多いものの単純な省略とらえて差し支えないだろう。

代表，而其代表者乃為法人，此何故耶，世界有心人所宜一垂念者矣。夫以安南人欲求新道德，甚願一列席於世界基督教會，然且以法政府禁安南人出口，故遂不得往而終以法人代之，則是亡國之人雖至於求道德而且不得自由也。果有上帝者其視此等人類當何如耶。開會之第二日，同盟大會會長宣講謂道德和平之途非由博愛不可。博愛惟基督能之。嗟乎。此語而果非欺人之語也者。吾儕豈非人類乎。豈非亦基督之所當愛乎。開會之第三日，大會各代表分股討論，以第一股中所討論之七問題，最能引起世界人類之注意。對於第一第二問題，美代表之所主張則曰基督教徒對於強凌弱大殘小，當取縣知事態度，以警察武力制裁之。又曰因愛護而用武力則可，非為愛護則不可。又有澳大利亞代表則曰因驅除惡魔敗類，基督當亦以特別武力從事。中國代表北大齊君則謂戰爭之禍源，如殖民政策，如軍國主義，如經濟滅國等等，均為致戰爭之原，則當消滅之。凡以上各論調，皆空谷之足音，使吾聞而竊然喜也。所尚遺憾者則北大齊君之所言乃未及於宗教滅國。嗚呼，吾儕所遭乃宗教滅國之毒也。開會之第四日，中國代表余日章先生講演有云，耶穌所謂上帝為天父人類即為兄弟。若能將此真正平等親愛主義推行全球，躬行實踐，以使個人家族社會國家，一國民與他國民，一國家與他國家，均彼此立於平等親愛之地位，則所謂平民之運動功成，基督之大道普及矣。善哉言乎。美哉言乎。至哉言乎。予甚願余先生所言之必不我欺也。又甚願奉基督教者之力踐其言也。

予又記印度代表之言，則以為人類不平等，國際不平等，基督教徒當如何負責。彼對於此層，反覆辯論，再接再厲，不遺餘力。噫，殆為吾儕發同調之鳴乎。何其悲壯淋漓至此耶。

尤有菲律賓代表之一言，竟直揭強權家之面幕而唾罵之。予不禁為之五體投地矣。彼之言曰，世界各國口是心非，自私自利，不依基督之教訓，濫用武力於強弱之間，尤非上帝所能容。旨哉言乎。何其正大而痛切若是也。

其與吾儕為同病相憐之親友者，則為朝鮮。朝鮮代表之言曰，朝鮮丁此受苦厄運，祇好暫忍，待上帝扶助。痛哉言乎。上帝其果扶助朝鮮乎。吾儕恐亦非上帝所忍棄也。上帝嘗奉吾國以贈法蘭西人矣。謂之何哉，謂之何哉。

如右所述，皆今年世界基督教學生第十一次大會時發表之言論意旨也。會長穆德博士之言曰（見國聞通信社譯大陸報北京通信），不合人道之競爭以及過當之民族主義軍閥主義與奴使人類之各種制度，應悉予屏除。欲竟此大功則其最有力之團體莫過於有耶教思想以世界為範圍之組織。夫果以世界為範圍則凡世界人類之不平，當必消滅於此範圍之內而無疑者矣。

博士又有一最簡要切明之語曰，深信基督教主義，實為達真正人道主義最要之途徑。

【翻訳】

しかしながら、近頃我々に一縷の望みを与えるいい知らせがあった。それは世界基督教学生同盟会が去年の4月に北京の清華学校で開かれたことである。私はいまなお覚えている。開会第一日目は四月初四であり、世界各国の代表が一堂に会していた。安南〔ベトナム〕にも代表がいたが、その代表はフランス人であった。これがなぜかということは、世界中の心ある人々が懸念す

べき事柄である。そもそも、安南人としては新たな道徳を求めようと、まずは世界の基督教〔同盟〕会への列席を強く願っていたのだが、フランス政府が安南人の出国を認めないために行くことができず、それでフランス人が代わりとなったのである。ということは、亡国の人間は道徳を求めることにおいてさえも、自由を得られないのである。もしほんとうに神というものがあるのなら、こうした人類のあり方をどうぞ覧になっているのだろうか。開会二日目、同盟大会の会長がスピーチを行い、「道徳と平和の道は博愛によるものでなければならず、博愛はキリストのみが行うことができる」と訴えた。ああ、このことばは人を欺くことばではないか。私たちは人間ではないのか。キリストによって愛されるべきではないというのか。開会三日目、大会の各代表はグループに分かれて討論した。第一グループで討論された七つの問題はもっとも世界の人々の注意を引くものであった。第一、第二の問題について、アメリカの代表が主張したのは、キリスト教徒は強い者が弱い者をいじめ、大きな者が小さな者を損なうことに対して、県知事のような態度をとるべきで、警察の武力によって制裁を与えるというものであった。そして、愛護にもとづく武力の行使はかまわないが、愛護のためでなければだめだとも述べた。さらに、オーストラリアの代表は、悪魔・ならず者を駆除するためなら、キリストは特別な武力をもって任務を遂行すべきであるといい、中国代表の北京大学の齊君は戦争の根源、たとえば植民政策であるとか、軍国主義であるとか、経済による国家滅亡策であるとか、それらいずれも戦争の原因となるものは消滅させるべきだといった。以上のようなそれぞれの論調は、どれも空谷に響く足音であり、私は聴いていてひそかに喜んだ。それでもなお残念なのは、北大の齊君の発言が宗教による国家滅亡策に及んでいないことである。ああ、私たちが遭遇しているのは、宗教による国家滅亡の害毒なのである。開会四日目は、中国代表の余日章〔1882-1936、中華基督教青年会全国協会総幹事〕先生が講演した。イエスの申される神は天にまします父であり、人類はつまり兄弟であると。もし、この真の平等、親愛主義を地球全体に押し広げ、みずから実践することで、個人・家族・社会・国家を一つにし、自国民と他国民を一つにし、自国と他国とを互いにひとしく平等と親愛の地位に立たせることができたなら、いわゆる平民運動は成功し、キリストの大道はあまねく行きわたるのである。なんとよいことばだ。なんと美しいことばだ。なんとすばらしいことばだ。私は余先生の言うことが決して私を欺くものでないことを心から願う。そして、イエスの教えを奉じる人々が、そのことば通りに全力で実践することを心から願う。

私はインド代表のことばについても覚えている。それは、人類の不平等、国際関係の不平等について、キリスト教徒はどう責任を負うべきかというものであった。彼はこの点について繰り返し言及し、その舌鋒はますます鋭く、余すところがなかった。それはほとんど私たちと同じ叫びを発していたのである。ああ、何たる悲壯、ここまで思い切るとは。

フィリピン代表の発言もあった。強権家の真の姿を遠慮なく暴き立てては口を極めて罵り、私はまさに五体投地のありさまだった。彼の言うには、世界各国は言っていることと考えているこ

とが違っており、自分の利益のみを図り、キリストの教えによらずして強弱の差を背景に武力を濫用しているが、それは神が許されるものでは全くない。その通りではないか。何たる正しさ、ここまで痛切に響くとは。

私たちと同病相憐れむ親友であるのは朝鮮だ。朝鮮代表のことばは、朝鮮はいまこの苦しみと悪運を受け、ただしばらく耐えて、神の助けを待つほかはない、というものだった。なんと痛ましいことばか。神ははたして朝鮮を助けてくれるのか。私たちもまた神に見棄てられたわけではないのかもしれない。[だが、] 神はかつて我が国をフランス人への贈りものとしたのだ。いったいどういうことなのか。

ここまで述べてきたことは、すべて今年の世界基督教学生第十一回大会に際して発表された論の概要である。会長のモット〔John R. Mott〕博士はこう語った（国聞通信社が訳している『大陸報』「北京通信」を参照されたい）。人道に合わない競争、および過度の民族主義・軍閥主義と人を奴隷扱いする各種制度は、ことごとく取り除くべきである。この大きな仕事を成し遂げるのに最も力のある団体は、キリスト教思想を持ち世界をその範囲とする組織を措いてほかはない。それが本当に世界を範囲とするのであれば、あらゆる世界人類の不平等はこの範囲のうちに必ずや消滅するに違いない。

博士はまた、もっとも簡単にして明瞭な一言を述べた。それは、キリスト教主義を深く信じることは、まさに真の人道主義に達する一番大事な道筋であると。

長い紹介となってしまったが、これが本稿のいう欠落部分である。まず背景となっている舞台は、1922年4月4日から9日にかけて清華学校で開催された世界キリスト教学生同盟の第11回大会である。実はこの大会が開かれることを契機に、中国では特に青年・学生のあいだで反キリスト教の運動がたいへんな盛り上がりを見せていた。それは新文化運動以来、儒教批判の陰で留保されてきたキリスト教批判の動きが一気に噴き出したもので、科学的精神の強調からする宗教批判や社会主義の隆盛を前にした帝国主義批判の文脈とも結びついて、20世紀20年代における社会思想上の転機となった¹⁴。だが、そうしたキリスト教批判の声とは別に、大会自体は成功裏に幕を閉じた。チャウがこの大会の風景をあえて描出したのは、キリスト教への批判・賛同の双方の声があることを意識しつつ、思想的対立が熱気を帯びる状況をとらえ、どちらの立場にも届くようなかたちで効果的にベトナムの現状を訴えたかったからであろう。そういう意味では中国の思想

14 石川禎浩「一九二〇年代における「信仰」のゆくえ——一九二二年の反キリスト教運動の意味するもの」狭間直樹編『一九二〇年代の中国』汲古書院、1995年を参照。石川は、20年代の反キリスト教運動の起源について、少年中国学会、なかでもパリに暮らす勤工儉学運動を実践するパリ在住の青年たちの影響を指摘し、宗教の非科学性を批判する一点で立場を超えた広範な共闘をみた北京を中心とする非宗教大同盟、キリスト教批判を反資本主義・反帝国主義へとつなげようとした上海を中心とする非基督教学生同盟のそれぞれの運動の特徴を分析している。

状況を読もうとする企図がうかがえる。

ところで、大会の様態を一息に描写する冒頭は、相当な分量にもかかわらず、引用部分には改行が全くない。ところが、後続する文では逆に改行が繰り返されるようになる。そこにチャウはアジアの各植民地からの声を載せており、最も伝えたいであろう力点を明示する意図において、単なる改行にも思想が示されているのである。

インド・フィリピン・朝鮮の代表のことばは、それに先行する中国代表の発言とともに、「善哉言乎。美哉言乎。至哉言乎」（中国）・「旨哉言乎」（フィリピン）・「痛哉言乎」（朝鮮）、あるいは「何其悲壯淋漓至此耶」（インド）・「何其正大而痛切若是也」（フィリピン）と同じ格調のうちに響いているが、なかでも注視したいのは、朝鮮代表に言及した部分である。そこでは「我らと同病相憐れむ親友」と述べられ、日本の植民地となっている朝鮮の状況が、神によってフランスへの贈り物とされた自らと重ねられている。ベトナムと朝鮮との対比は、20世紀初頭以来のベトナム独立運動の中で繰り返されてきたモチーフでもあった¹⁵。

本節冒頭で紹介したように、東洋文庫版所収の邦訳では、原著にあった内容の大幅な欠落を伏せたまま、一旦改行して下文へと接続させている。そこに不自然さは一切なく、まるで何事もなかったかのように、フランスの植民地主義を指弾する言説は続く。先ほど「改行にも思想が示されている」と書いたが、欠落させたその操作自体もやはり翻訳者の思想を語っているのではないだろうか。この点について筆者の推測にもとづいて分析してみたい。翻訳者の「南溟生」がアジア主義の立場に立ち、日本が主要な役割を果たすかたちでベトナムの独立運動を支援したいという熱意を持っていることはその行文からありありとうかがえる。そして、その立場に立つ限りにおいて、朝鮮への言及が含まれていることはきわめて不都合だったのではないだろうか。朝鮮代表の発言自体はそれほど厳しいものではなくとも、フランスの苛烈な支配の具体例を列挙する著作においてチャウが共感を示すことは、同じような行為をしている日本の姿を想起させるのに十分である。また、世界キリスト教学生同盟大会という公の場でなされた発言であり、しかも通信社から世界に発信されている以上、その部分だけを削除するということは、おそらくできなかったに違いない。日仏外交当局による監視・牽制の下で1925年に長崎で開かれた全亜細亜民族会議長崎大会において、日本側が自らの立場を掘り崩す恐れから植民地である朝鮮・台湾の扱いに最後まで苦慮し、実際に朝鮮代表との間で紛糾があった経緯¹⁶は、その傍証ではなからうか。

15 越南河内阮尚賢鼎南「桑海淚談」『南枝集』巻下、乙丑冬十月（1925年）。作者のグエン・トゥオン・ヒエンはファン・ボイ・チャウの盟友で、晩年は杭州に暮らした。「桑海淚談」は清末の各雑誌メディアに掲載されたが、冒頭部分に亡命ベトナム人である私が朝鮮の閔君と互いの植民地状況について語り合う場面がある。

16 宮沢千尋「クオンア侯と全亜細亜民族会議長崎大会一東遊運動瓦解後のクオンアの思想と行動（5）」『ベトナムの社会と文化』7号、2007年3月を参照。

IV おわりに

『天か帝か』の欠落部分全体について、本論からみれば枝葉のエピソードであり、削除したのはあくまで翻訳編集上の判断であったといういい方もできるかもしれない（本稿注13に示すように）。だが、「例言」において「今あえてこれを改めず」と言及していること、そして、欠落部分前後のあまりにもなめらかな接合を考えると、やはりこの日本語テキストは西洋への対抗を志向する日本的なアジア主義の立場を表明した一作品と考えるべきであろう。その系統のみのベトナム理解には不足のところがあるという意識から、本稿ではその欠落部分を埋めることを目指した。ベトナム民族主義の書『天乎帝乎』は、1920年代初頭の反キリスト教運動を含む中国の思想文脈を意識するかたちで書かれた。それを翻訳した日本の「南溟生」は進展する国民革命のただなかにあり、日本の読者を念頭に置いたとき、アジアの植民地批判の言説を欠落させた。そのことによって、おそらく中国社会の思想的文脈を離れるとともに、西洋との同列視を回避することが企図されたはずである。そして、1941年、仏印進駐を果たし米英との対決を目前とする日本で大岩誠に「再発見」された『天か帝か』は、その欠落を維持したまま、改めて不変のテキストとして確立することとなった。各種版本の存在それ自体が、多国間・多文化間のヘゲモニー闘争の痕跡を深く残している。

